



Title	ファッションにおけるサステナブルデザイン
Author(s)	成実, 弘至
Citation	デザイン理論. 2013, 62, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56407
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ファッションにおけるサステナブルデザイン

成実弘至／京都造形芸術大学

●はじめに

21世紀を迎えてファストファッションと通称される廉価なアパレルブランド群が巨大に発展し、デフレ状況下で大衆の支持を集めている。しかしグローバルに資源や労働力を活用してコストを下げ、大量生産・大量消費を促進するもの作りの姿勢に疑問を抱く人は少なくない。持続可能性が時代のキーワードとなっている現在、これからのファッションにもサステナブルデザインの発想が求められてくるだろう。

発表者はこの数年間、京都造形芸術大学ファッションコース4年生学生とサステナブルデザインについて研究調査するゼミをおこなってきた。このゼミのテーマはひとつのオルタナティブとして「スローファッション」について考えることにあった。20世紀デザインが大量生産・大量消費を概ねとして進んできたのであれば、ファストファッションはその申し子にほかならない。これに異を唱えるなら、そうではない衣服のあり方を構想する必要がある。それはどういうものになるのか、学生たちとともに考えることがゼミの大きな目的となった。

本発表は、4年間のゼミ活動の内容を紹介することを通して、スローファッションについての予備的な考察をおこない、会員からの意見や批判を今後活かすことを意図しておこなわれた。

●スローファッション・ゼミ展

これまでゼミで研究調査した成果は展覧会と冊子を作成して発表してきた。なぜ展覧会

形式をとるかということ、デザイン専攻の学生たちにとっては大学での学びだけではなく、それを制作に結びつけ作品として学外に発表するほうがより高いモチベーションを喚起できると考えたからである。ゼミをこの形にしたのは2009年以来である。

2009年はリサイクルをテーマとして、繊維リサイクルに取り組む京都工芸繊維大学木村照雄教授、オーガニックコットンの普及に携わる大正紡績の近藤健一、製品を回収して燃料にするプロジェクトを立ち上げたワコール、生分解可能繊維を用いた服づくりをおこなうエコマコのデザイナー岡正子、リメイクライン「ピース」をスタートさせた皆川明、古着を染め替えるサービス「エベベ」をおこなう森陰大介らにインタビューした。環境意識が高まる一方、繊維リサイクルが必ずしも効果をあげていない状況を把握したうえで、学生たちは古着や擬木（繊維を粉碎してから熱圧縮して材木状に変えたもの）から制作した作品を展覧会「ミッション・イン・ファッション」（10月10～25日、三条アートゾーン）に展示した。

繊維リサイクルが停滞していることを知り、サステナブルデザインをどう考えるのか、継続的に取り組んでいくこととなる。

2010年はグローバル化による国内産業の衰退を考えるため、関西の工場（妙中パイル、カワバタプリント）を見学、そこに働く人から話を聞きつつ、デザイナーやジャーナリストに日本ファッションの将来について聞くことにした。またストリートやガールズコレクションのような消費動向を見つめ、日本の

ファッション界がどこへ向かおうとしているのかをとらえようと試みた。

学生たちには「日本」を題材に自由に服を制作させ、展覧会「ネオジャポニズム、なう」(11月6～16日、スフェラギャラリー)で展示をおこなった。

2011年のゼミは地方のもの作りと環境問題のふたつの方向から、より具体的に「スローファッション」を描き出そうとした。前者は産地のもの作りをサポートするテキスタイルデザイナー梶原加奈子、京都でフェアトレードの店舗を展開するシサム工房の人見友子、DESIGN EASTの活動をする建築家柳原照幸、京都をベースにした服作りに取り組むブランドひなややNINPなどから話を聞くことにより、後者はカリフォルニア大学でサステナブルデザインを教えるアン・サバジョーによるワークショップをきっかけに、廃材の活用、廃棄物を出さないパターンを考案するなど、サステナブルデザインに取り組んだ。

展覧会「スロウダウン・ザ・ファッション」(10月22～30日、ソーシャルキッチン)では学生作品を展示するのではなく、ワークショップを中心に据え、一般の親子や高校生とともに不要な布から財布や鞆を制作したり、学生たちがテーマを決めカフェ形式で意見交換するなど、コミュニケーションの場所作りに力を入れた。

2012年はシェア、オープンソース、エコロジーの3つの視点から、もの作りを通じたコミュニケーションやコミュニティづくりの現場を調査した。プロのデザイナーではなく、主婦や高校生によるもの作りの自由闊達さに着目し、フリーマーケットや部活を取材した。またデジタルファブリケーションによる服作りにも注目した。

展覧会「Fashion 3.0」(10月23～30日、ソーシャル・インスティテュート)は、一着

の服に数名の人々が思い思いに意匠を加えていくことで制作されるシェアファッションや、廃棄野菜・果物から紙を制作してプロダクトを開発するプロジェクトなどに取り組み、会場にその成果を発表した。また会場では擬木でジュエリーを制作するワークショップやソーシャルデザインのウェブサイト主催者のトークショーが開催された。

●スローファッションを考える

このような活動から、スローファッションを4つのキーワードにまとめてみたい。すなわち、「サステナブル(経済成長を至上価値とするのではなく、低炭素、循環型社会を目標とする、持続可能なもの作り)」「ローカル(地方からのデザイン、多様な働き方の追求)」「ソーシャル(グローバルな共生社会の創出、フェアトレード、オーガニックコットン)」「ロングライフ(長く使える服、素材からリサイクルまで射程に入れた、デザイン)」である。すでにスローファッションを実践する動きはあり、それに共感する人々も増えてきた。

英米でもサステナブルデザインの立場からスローファッションに言及する研究者が登場している。彼らの定義は必ずしも一致するものではないが、ファストファッションが象徴する大量生産・大量消費に歯止めをかけようとする問題意識、もの作りを生産-消費-リサイクルの循環のなかで発想すること、新しい出発点から生活や社会を構想することなどの主張において共通する。

4年間ゼミをして気づいたのは、今のファッションのあり方に違和感や抵抗感を抱いている人が少なくないことだ。今後、スローファッションやサステナブルデザインの動きがどう展開していくのか、よく見守っていきたい。